

アイルランド詩人 W. B. イェイツの夢

羽 矢 謙 一

松 山 大 学
言語文化研究 第32巻第1-2号 (抜刷)
2012年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 32 No. 1-2 September 2012

アイルランド詩人 W.B. イェイツの夢

羽 矢 謙 一

プロテスタント・アセンダンシー

7世紀以降のアイルランドは、いく人かのゲール人（原アイルランド人）の「族長」による支配下にあった。彼らは各自の勢力範囲を広げながら、スカンジナビア半島からのバイキングと呼ばれた侵入者と戦っていた。8世紀末ごろには彼らのあいだに、自分たちは一つの共通語、つまりゲール語を話す一つの国家であるという意識が生まれていた。8世紀末というのは、ちょうどバイキング来寇が始まった時期であり、それは12世紀まで続いた。

1169年にイギリス国王ヘンリー2世の率いる、今は臣下として仕えるノルマン人とイギリス人の連合軍がアイルランド南西部に侵攻を開始した。彼らはイングランドから使用人を連れて行って、土着のゲール人を追い払って、そこに住み着いた。

だが一方ですぐに勢力を回復したカトリック先住民の族長と、もう一方で中世のイングランドからアイルランドに攻めてきて、アイルランドに定着し、私兵を養って、元の主人であるイギリスの王権から離れてそれぞれ領主となった者たちがいた。イギリス王は彼らからイギリスの移民を守るために彼らと戦わねばならなかった。とくに最初のころは、ダブリンにおかれたイギリスの総督府、つまりイギリス王室の管理官を通してのイギリス王権の実効支配が及んだのは、ダブリンを中心とする周囲の4県だけであり、イギリスはこの4県の外辺に尖った棒杭を打ち、4県を「ペイル」（柵内）と呼ばれる地域にしたのである。

しかし、中世末期の16世紀後半から17世紀の初めにかけて一大事件が起こった。それはイギリス王ヘンリー8世の改宗ということで火がついたのであった。結局は王党派の勝利に終わって、プロテスタントの天下になるのだが、イングランドからアイルランドに進軍してきた王の臣下の貴族や彼らに従った一般人の力も強力なものになった。これらプロテスタントの入植者たちは、イングランドの国王から、彼らが侵略したアイルランドの土地分配を受けて大地主や貴族になった。彼らは国王から爵位を授けられた。こうして1541年にイギリス王ジェイムズ1世はアイルランド王に就任の宣言をおこなった。

しかし、これらイングランドから新たに海を渡ってきた16世紀後半以後の、プロテスタントのイギリス人の中に、原住民のアイルランド人の女性と結婚し、「アイルランド人」として彼らに同化してゆく者も現れた。アングロアイリッシュ（イギリス系アイルランド人）の出現である。彼らは「イギリス人」としてプロテスタントのイギリス国王に忠誠を誓い、イギリス文化を愛しながらも、その一方でアイルランド人として、イングランドのイギリス人とは違った国家意識を持ち、18世紀に入ると、進んでアイルランドの国土を愛し、宗教を超えてカトリック系の貧しい住民を愛する者も現れてきたのであった。

だが18世紀の初頭にはアイルランド議会の議員は全員がプロテスタントで占められ、アイルランドの上層階級になった彼らプロテスタントは全員英国国教会に属した。一方で、1695年に始まり、1829年カトリック解放令が出るまで、カトリック弾圧の異教徒刑罰法（ピナル・ローズ）によってカトリックは弾圧された。カトリック教徒は21年間土地を買うことも借りることも禁じられた。一家の財産は長男がプロテスタントに改宗しないかぎり、弟たちに分配された。アイルランド政府の高官の職はイングランド人にかぎってあたえられた。プロテスタント貴族の地主に小作人が払う借地料は、おびただしい数にのぼった「不在地主」によってイングランドで消費された。カトリック教徒には投票権が与えられず、またアイルランドで、エリザベス女王によってイギリスの国策として1591年にダブリンに創立されたトリニティカレッジに、カト

リックの子弟は入ることができなかった。

これがプロテスタント・アセンダンシー（プロテスタント支配）といわれるものである。このイギリス系アイルランド人の貴族はイギリスの国王によって与えられた自分の荘園の景色のよいところに、「パラディアンハウス」と呼ばれる大きな邸宅を構えた。それはアンドレア・パラディオ風の屋敷という意味である。パラディオは16世紀に古典主義建築の様式を研究して、ヨーロッパのルネッサンス建築に影響を与えたイタリアの建築家である。

だがこの18世紀のプロテスタント・アセンダンシー、別名アングロアイリッシュ・アセンダンシーの盛期は、イングランドのジョージ王朝、つまり、ジョージ1世からジョージ4世までの時代と重なっていて、イェイツはこの時代を熱烈に愛していた。それはこの時代がもう一つの顔を持っていたからである。イェイツはこの時代の中に、彼自身が考えていたアイルランドの文芸復興、というより文化全般の復興モデルを見たのである。この時代、イギリスは政治面では重商主義や海外領土拡張の忌むべき時代であったが、イェイツの「近く」には、時代を超えた、アイルランドの文化のよき理解者、真に革命的な指導者がいた。彼らは単にアイルランドに生まれたというだけではなく、アイルランドで教育を受けた人々であった。エドモンド・バークは弁護士の息子、ウルフ・トーンは馬車作りの職人の息子、ヘンリー・グラタンは自治市の法律顧問の息子、オリーヴァ・ゴールドスミスは田舎の牧師館の息子、そしてジョナサン・スウィフトとジョージ・バークリーも上の四人と同じく、大きな邸の生まれではなかった。彼らは田舎の貧しい人々に深く接し、彼らを愛し、彼らの生き方に学び、彼らと共に自由を愛したのであった。イェイツはこれらの人々の中に「賢者」の姿を見たのだと思う。そして彼自身も、偽物ではなく「真の知識人」になることを願ったのだ。

アイルランド人飛行士官の死

英国飛行士官ウィリアム・ロバート・グレゴリー少佐は1918年1月23日、37歳の若さでこの世を去った。北フランス戦線の上空での作戦を終えて、イタリア北部の後方基地にもどる途中、撃墜されたという。また一説によれば、友軍のイタリア機によって誤って墜とされたという。もしかすると若い花形の英国空軍士官の自爆的な孤独の死という不名誉を糊塗するための、子どもじみたデマの情報ではないか。

ロバート少佐は、元セイロン総督のサー・ウィリアム・ヘンリー・グレゴリーと、後妻のレイディ・オーガスタ・グレゴリーのあいだに生まれた一人息子であった。1881年にロンドンに生まれて、イエイツよりも16歳年下である。グレゴリー夫人はイエイツより13歳年上であったが、イエイツにとっては生涯敬愛する友人だった。

イエイツの「アイルランド人飛行士官、死を予見する」と題する詩は1918年8月号の『イングリッシュレビュー』誌に発表され、翌年1919年の詩集『クール荘園の白鳥』に収められた。実際に書かれたのは1918年1月のグレゴリー少佐の死後まもなくのころと考えられる。

この詩は生前のロバートが戦場に向かう飛行機の中で、死を覚悟した自分に向かってつぶやいている形をとっている。

ぼくには分かる 空の雲間のどこかで
 ぼくは最後を遂げるだろう
 ぼくは戦いの相手を憎いとは思わない
 ぼくは守っている人たちを愛しているとも思わない
 ぼくの祖国はキルタータンの村の十字路
 僕の同胞はキルタータンの貧しい人たち
 けれどぼくが死んでもあの人たちが失うものは何もない

あの人たちが今より幸せになるとも思われぬ
 法律や義務がほくに戦場に出ることを命じたわけでもない
 役人のせいでもなければ民衆の歓呼のせいでもない
 何よりも欲するままに生きたいと願う孤独な衝動が
 雲間の乱闘に向かって突っ走ったのだ。
 ぼくはすべてを秤にかけ、すべてを思い返した
 するとこの今の瞬間の生、つまりこの今の瞬間の死とくらべたら
 これから生きる歳月なんていのちの浪費としか思えなかった
 これまで生きた歳月もいのちの浪費だった

戦闘機の先頭の銃座に座って、若い空軍少佐の心の中に今まで自分が何もし
 てこなかったという、空しい思いが広がる。彼が今一人で行動しているのは、
 ほんとうに愛する祖国を守るためでもなく、ほんとうに愛してやまぬ祖国の村
 の人たちを守るためでもない。では彼の祖国はどこにあるのだ？ 村人たちは
 どこにいる？ どこにもいないのではないか。彼の方からそれらのものを振り
 捨てて、今この孤独な戦闘機の狭い室にただいるだけではないか。彼はむりやりに
 自分が何か形のあるものに向かい合い、何か形のあることをやっているのだと
 思い込もうとしているだけだ。でも、彼が今ここに、狭い空間の中に来ている
 ことによって、アイルランドの人々がいくらかでも幸せになっているというの
 だろうか。つまり彼は今、たった一人で、抽象の世界で何かを思い、何かをし
 ていると思いついでいるだけだ。だが実は彼がやっていることは何でもないこ
 とであり、何のためにもならないことでしかない。抽象的な空間の中で、一人
 芝居をやっているにすぎないのではないか。そういえば、これまでやってきた
 自分の過去も、そうではなかったか。そしてたとえこのち生き残ったとして
 も、死ぬまで何の意味もなく生きるだけのことではないか。今、このときまで、
 アイルランドとアイルランドの民衆のために有意義なことをやりたいと思いつ
 づけてきたグレゴリー少佐の夢が、この瞬間に無残に消えたのだった。

ロバート・グレゴリーは先祖がアングロアイリッシュの支配者入りした家系に生まれた。グレゴリー家の本拠地はアイルランド西部コノホト地方、ゴールウェイ県にあるクール荘園であった。そこから北寄りの東側にあるキルタータン村が、グレゴリー家の先祖が英国王室から授封された領地（男爵領）だった。この村は13世紀の古い城とカトリック教会のある村で、アイルランドの原住民であるゲーリック人の村であった。教会の廃墟の跡は十字路になり、その周辺地は原っぱになっていて、そこは村の人たちがよく集まる場所であったのだろう。イエイツの詩の中ではキルタータンクロスと呼ばれている。

ロバートはロンドン北西部の郊外の名門私立高校であるハロースクールを出て、オックスフォードでギリシア語とラテン語を学び、ホメロスやウェルギリウスやダンテを読んだ。彼はイギリスの文化を吸収し、親英派のプロテスタントの知識人としてアイルランドに貢献しようとしたに違いない。彼はまたキルタータンの村の人々を愛していた。彼らに古典を読んでやったりしたであろう、その一方で、自らはアイルランド語（ゲーリック）を学んだ。村の人からゲーリックを教わりもした。また、母親のグレゴリー夫人やイエイツと一緒にゲールの古い民謡の蒐集に力を尽くした。村の人たちもご領主さまの若殿として彼を慕っていたことであろう。つまりロバートは彼の郷里の人々の肌にはじかに触れ合って彼らに接したことと思われる。彼は学問だけではなく、芸術家としてもスポーツマンとしてもすぐれた才能を示した。たとえば馬術をよくし、またパリの肖像画家のジャック・ブランシュのアトリエで学び、さらに舞台装置のデザイナーであるチャールズ・リケッツと一緒に初期のアベイ・シアターの建設の設計にもたずさわった。いわば彼は万能選手であり、イエイツは年下のロバートに、新しいアイルランドの文化の担い手として期待していたに違いない。「アイルランド人飛行士官、死を予見する」の詩と並んで、ロバートの死後まもなく書かれたイエイツの詩「ロバート・グレゴリー少佐を偲んで」の中でのイエイツの言葉を借りれば、ロバートこそ「われらのシドニー、われらの完全人」であった。それはイギリスルネッサンス時代の理想的人間像を示す

言葉であった。

ロバートは1915年に英国陸軍に入隊したが、翌1916年、飛行士官として英国飛行隊、のちの英国空軍に転属した。彼が英国の軍隊に入ったのは、「アイルランド飛行士官、死を予見する」の中で詩人がロバート自身に語らせているように、決して強制的な徴兵のためではなく、また民衆の歓呼の聲に送られてゆくためでもなかった。むしろそれは彼が自分から進んで志願した結果であった。第一次世界大戦の成りゆきが開戦当初の人々の思わくと違って深刻化の様相を呈してきたため、英国の募兵制から徴兵制への切り換えが1916年1月に行われ、徴兵制への反対の聲が大きく上がったのであったが、ロバートの英国軍隊への入隊はそれより前のことであった。彼の飛行隊への転属も、たぶんいきなり空軍士官として迎えられたのも、彼が貴族の出身者であるということもあったのであろう。

そもそもロバートが英国の軍隊に志願して入隊した理由は何だったのだろうか。それは彼が、1690年7月1日、アイルランドの東部、レンスター地方の東北部を流れ、アイルランド海に注ぐボイン川の南岸で、オレンジ公ウィリアム3世を奉じて、カトリックのジェームズ2世の軍を破ったプロテスタント貴族の子孫としての「イギリス国民」であったからである。ロバートの中には、17世紀末の軍鼓の響きの下にボイン川で戦った彼の祖先の血がめざめたのだと思う。彼はたとえいつかはアイルランド人がイギリス帝国の支配から完全に抜け出すことを願っていたにしても、今、仮にも英独の戦いの機に乗じてイギリスの背後から発砲するようなことはできなかったのだ。アイルランドを守るためにも、イギリスの軍隊に加わらねばならない。それが彼の大義だったのだ。しかし、入隊してからまもなくのロバートに関して気になる証言がある。それは英国飛行隊に中隊長として配属されたロバートについてイェイツが書いたロバートを追憶した文章の一節である。これはロバートの戦死からひと月たらずのち、1918年2月7日の『オブザーバー』紙に掲載された死亡記録として「愛惜する故人についての覚え書き」と題して発表されたものであった。現在これ

は『W. B. イェイツの未収録散文』に収められている。

グレゴリー少佐はフランスの基地に彼を訪ねてくれたバーナード・ショー氏に、自分が軍隊に入ってから数か月間は自分の生涯で最高に幸せでしたと打ち明けたのだった。ぼくが思うにその数か月間がロバートに心の安らぎをもたらしたのだ。ぼくはそれまでにも、ときどきロバートの顔に後ろめたいような表情が現れるのを見ることがあったが、そのときショー氏に見せた明るさは彼がそんな後ろめたい気持ちから解放されていたことを示していたのだと思う。だがすぐにそのあとから彼の夢が、彼の孤独な夢がふくらんで、彼を吸い込みそうになるのだった。彼の莊園の人々から気のおけないつき合いと友情を得たのは彼に恵まれたもう一つの天賦の才能のおかげだったが、あの入隊の数か月間はそれらの才能からの呼びかけに絶えず抵抗しようとする苦悶から解放されていたに違いないとぼくは思う。フランスやイタリアの戦線で彼が自分の飛行隊の先頭に立って飛行してゆくとき、心と手が、決意と実践が一体となっていたのだ。

だがロバート少佐の選択はほんとうに間違っていなかったのだろうか。彼の「決意と実践」がほんとうに手を結んでいたのだろうか。ふつうには考えられないくらいのキルタータンの小教区の村の領民たちの、彼らの若い主人への敬愛と親密さをあっさり振り捨てたロバートだったのではないか。彼が歩みの遅い時の流れを歩いてゆくふつうの地上の人間世界を捨てて、天空の「孤独な」世界の中で、一瞬の現在の時を超高速で突き抜けてゆくことに無上の喜びを見いだそうとした気持ちは分かる。だがロバート少佐が自分では何と考えようとも、それは、結局はこれまでどこにおいても見られた、あのあくまでも安っぽい英雄主義と同列におかれる、おろかな行動ではなかったか？ 過去も未来も振り捨てた、あまりにも、性急な解釈ではなかったか？ ロバート少佐がたった一人、そんな自分の「夢」の中に吸い込まれてゆくとき、自らの「夢」に対

抗して、ふたたび疑問がいやおうなしに起こってくる。空中戦で敵味方の入り乱れての殺し合いをすることの空しさ、多くの人を殺すという罪悪感が。彼がせっかく獲得したつもりの「心の安らぎ」をそれは乱そうとする。

そんなとき一つの大きな事件が起こった。ロバートが1915年に入隊してたぶん1年も終わったころだろうか。1916年4月24日の月曜日から29日の土曜日までの、復活祭週の1週間、武装したアイルランドの愛国者たちがダブリンの中央郵便局を占拠し、そこでアイルランド共和国の独立宣言を世界に向けて発表して英国からの派遣軍と戦ったのだ。この蜂起については当初ダブリン市民の反応は冷やかかだったが、蜂起の鎮圧後、英国によって行われた15人の首謀者たちの処刑があまりにも急であったため、アイルランドの人々はもちろん、世界中の人々が英国政府に向かって非難のあらしを向けたのだった。裁判はもちろん行われず、詮議さえろくにされず、当局は5月2日から11日までの間に、ダブリン郊外のキルメイナム監獄の地下室で深夜、蜂起の首謀者たちを次々に銃殺したのだった。

この事件が戦場にいたロバート少佐をはじめ、アイルランド出身の兵士たちに伝わらないはずはなかったと思う。一時は秘密情報として伏せられたかもしれない。しかしそれが伝わったとき、彼らが受けた衝撃はどんなに大きかったことだろう。彼らは「イギリス国民」として、「イギリス国軍」の兵士として戦場に送られてきたはずだ。彼らの誇りは一挙にその高みから突き崩されたと思う。なぜなら、イングランドのイギリス人やイギリスの兵士からみれば、彼らアイルランドの兵士たちの故国は「兄弟国」どころか、属国にすぎないということをアイルランドの兵士たちは思い知らされたに違いない。その証拠に、あの「復活祭の蜂起」は、今日もなお、イギリスの側からは「復活祭の反乱」と呼ばれている。現にフュージャリア連隊（英国の小銃兵から成る歩兵連隊）の中尉、トム・ケトルという人物は、大戦勃発に際してアイルランドを守るために、アイルランド中を募兵してまわり、自分も志願して出征した。だが復活祭蜂起の「反徒」の非人間的な処刑の報を聞いて、ただちに前線に移されること

を願い出て、まもなく激戦地ソムムの戦線で戦死したという（荒木映子『イエイツ研究』第29号、1998年）。復活祭蜂起の報が伝わったとき、グレゴリー少佐もあの明るさを急激に失い、部下たちと共に怒り、落ち込んでしまったことだろう。ロバートにとってはあの「反乱」の首謀者たちの中にはかつてアベイ座で見知った者もいたかもしれない。彼らはロバートが今、大戦の花形となった飛行機に乗りこみ、大戦の英雄となって、そしてイギリス帝国の広告塔として活躍し始めていたところに、彼の愛するアイルランドではそのイギリスによって無残に人々が銃殺されていたのである。そんなときロバートを慕って多くのアイルランドの若者たちがイギリス軍に志願し、入隊してきている、そういう人たちに対する責任に果たしてロバートは気がついたのであろうか。ロバートが英国軍に志願して入隊してまもなく、訪ねてきたバーナード・ショーに「後ろめたい」表情の影を見せたのは、まさにそんな時期であったのだと思う。ロバートが自分の死を予見するようになったのもそのころからのことではなかったらうか。

ロバートはイギリスに裏切られたという思いを持ったに違いない。いのちを懸けてイギリスの「国家」を守るために働くことの空しさを思い知らされたのだ。そもそも「国家」なんて抽象にすぎない。本当に生きているもの、血の通い合うものはキルタータンの村である。そこに生きる人々である。その人たちのために働くことが本当の愛郷なのである。それなのに、いたずらに早急な死、「瞬間の生」の中に溺れて死んでも、それは無駄な死でしかない。ロバート少佐が孤独な飛行機の銃座に座って、「カッコよく」死んでいっても、キルタータンの人々も、アイルランドも、それによって今より少しでも幸せになるというのか？

けれどぼくが死んでもあの人たちが失うものは何もない

あの人たちが今より幸せになるとも思われぬ

そうつぶやくロバート少佐の捨て鉢な思いからは少しも本当に生きる人間の姿は見られない。

このロバート少佐の自爆的行為を想像しながらみつめるイェイツの心情はどうだったろうか。君には「良き」プロテスタントの莊園領主として、まだまだ生きてこれからのアイルランドのためにもっと尽くしてほしかった。そんな無念の思いだったに相違ない。

「 報 復 」

イェイツは「アイルランド人飛行士官、死を予見する」執筆の3年後に、この詩の続篇というべき詩を書いた。それは「報復」と題されて、1921年に『ネイション』誌のために書かれたものだったが、ロバート少佐の母親であるグレゴリー男爵夫人からの、夫を亡くした親英派の若い嫁の気持ちを思いやっしてほしいというような申し入れがあって、発表は取り下げられた。たしかに、「報復」の詩では、前作よりもいっそう強くイェイツの反英の姿勢が打ち出されていて、ロバート少佐の死がまことに空しい死であったという隠された詩人の強い主張が明白に読みとれるのである。だがこの詩はのちに、イェイツの死後に『ラン／季刊アルスター詩』誌の1948年秋季号に発表された。「ラン」(Rann)という誌名はたぶんゲール語で「詩」または「同志」を意味する名前ではないかと思う。

「報復」はイェイツが亡きロバートに向かって直接語るという形を取っている。

聞けば君はおおよそ十九機ものドイツ空軍機を
 撃墜してこの世を去ったという
 ほくらは君のそんな死をあっばれなる死と呼んだ けれどこんにち
 死者と生者を問わずそれを聞いて満足できる人がいるだろうか

君の最後の花々しい年は
 君の言ったとおりほかの年を全部圧倒したけれども また
 戦いの喜びはたとえ死んだ人たちにとっても
 ほかの思いを追い払ってしまうほど
 とても大事な思い出となっているかもしれないけれども
 それでもあのイタリアの墓場から起きあがり
 キルタータンの村の十字路までひとつ飛びに飛んでいってみたまえ
 すぐに確かな思い直しが
 君が仕えた大義の上に そしてそれゆえほくらも
 そいつはよっぽどすばらしいものなんだろうと思ったものの上に行ってく
 るはずだ
 一杯機嫌かそれとも完全に気がふれた兵士どもが ほら
 君の領地の小作人たちを惨殺しているんだよ
 君の亡き父君を今も尊敬している男たちが原っぱに引き出されて射殺され
 ているよ
 結婚して間もない女たちがちゃんと座って
 赤ん坊に乳を飲ませる場所はどこにある？ 武装した男どもが
 行きずりに彼女らをなぶり殺しにしてゆくというのに
 法律も国会も知らん顔だ
 そんな話は聞きたくないと言うんなら 騙されて死んだ仲間たちと一緒に
 両耳を墓地の土ぼこりでふさがれたまま寝てるがいいさ

この詩はロバート少佐の死が何といても無駄死にであったことを、3年前の詩「アイルランド人の飛行士官、死を予見する」にもましてはっきりと述べている。グレゴリー夫人がこの詩の発表中止を求めたことの本当の理由はまさにこのことにあったと思う。ロバート少佐が英国政府によって騙され、裏切られたことは今や明白である。いや、騙されたといえばロバート少佐だけではな

く、グレゴリー夫人も、そして、イギリスびいきのプロテスタント・アセンダンシー貴族の子孫も、それら上流貴族の領地の村人たちもみな騙されたのだ。それは、彼らの誇りが英国によって無残に踏みにじられたことを意味するものだ。

第一次大戦が終わって、アイルランドでは一気に完全独立の気運が高まった。それは1916年のあのダブリンの市民軍の蜂起の延長であることを思わせた。英国は大戦が終わればアイルランドの自治を認めるつもりであったが、ダブリンのできごとはアイルランドのナショナリストたちにアイルランドの完全独立の決意を固めさせた。1918年12月14日の総選挙で新たに首相となったロイド・ジョージはイギリス国会で対英協力派であるユニオニストを与党として取り込むことはできたものの、南北アイルランドの完全一体の独立国の成立を求めるシンフェイン党は、できるかぎりアイルランドに自分たちの影響力を残そうとする英国政府の提案を拒絶した。一方同日の選挙でシンフェイン党も大量に進出した。そして彼らはダブリンの市長公邸に集まって自分たちだけの第1回国民議会を開いた。彼らはそこでイギリスの議会からの70名ものアイルランド代表議員の引き上げとアイルランドの独立国としての承認を世界に向かって求めることを宣言した。

これに対して、英国政府はシンフェインの勢力を武力で圧さえようとした。そのためアイルランドに駐屯していたイギリス軍の兵舎や警察署の襲撃や政府要人の待ち伏せと暗殺が行われ、それに対するイギリス軍による民家の焼き打ちや、テロの容疑者の処刑をひきおこした。そしてそれが1919年1月21日に始まったとされている英アイ戦争（アイリッシュウォー）に発展した。休戦は1921年7月11日であった。これは「独立戦争」ともいわれている。

この戦いの中で、英国は軍隊を増派したが、とくに1920年3月ごろからはブラック・アンド・タンという、カーキ色の服の上に黒いベルトを着け、濃緑色の帽子をかぶった雇い兵を「警備隊」と称してアイルランドに送り込んだ。だがこの隊の実体は無統制のヤクザ集団であって、アイルランドの各地で暴行

の限りを尽くしたという。とくにクールパークの所在地であるゴールウェイ県はわざと攻撃の目標にされたらしい。

この詩の表題の「報復」という言葉は、シンフェイン党の武装部門というふう言われる「アイルランド共和国軍」(IRA)にたぶん散々にしてやられた英国側の「仕返し」という、いかにもその言葉自体からして底の見えた言いわけの言葉としか受けとれない。文明国家としての英国に向かってイエイツが投げつけた怒りの言葉である。

そのイエイツはプロテスタントではあったが、中産階級の知識人であって、グレゴリー少佐と同様、早くから英国の文化の前向きの部分に対する期待を持っていた。そして彼のそういう姿勢は変わらず、彼は1922年12月1日に推薦を受けてから1928年9月の辞任まで、アイルランド「自由国」の上院議員になってからも、英国の社会と文化に学ぶべきことがあると信じていた。だがそんな英国文化への好感と信頼よりも、アイルランドへの、殊に故郷の平和な自然と田園の生活に囲まれた人々に抱いていた愛情はもっと大きかった。彼はその地点からアイルランドの南北の一体化と、それにもとづく本当の意味でのアイルランド共和国の実現を願ったのである(実は1921年の休戦後の英アイ条約の合意で、アイルランドの南部26県の、本当の独立とはいかなかったが、「自治」が認められ、北部のアルスターの6県は英国との連合の継続ということになった)。

ただし、イエイツは18世紀のプロテスタントの貴族が19世紀後期以降は衰退してきたことを感じていた。中産階級化した庶民の実利的な生き方に押された結果であった。クール荘園のグレゴリー男爵家やスライゴー県のリサデルのゴブーズ准男爵家などは、良きプロテスタント・アセンダンシーの名残を保っていて、イエイツは若いころから彼らの邸に出入りし、後年までそのころの思い出を懐かしがっていた。グレゴリー少佐の英国飛行隊への進んでの参加と、死への自爆的な「突進」も、目標を失ったアイルランド貴族階級の表象のようにイエイツには思われたのではないか。イエイツは北イタリアの基地に眠

るグレゴリー少佐の霊に向かって、英国の乱暴きまわる雇い兵たちによって踏みじられた彼の故郷の村に霊の力でいますぐに飛んで行って、村の惨状を目のあたりに見ることを勧めている。それが嫌だと言うのなら、たぶん粗末な埃っぽい土を被せたばかりのような墓地に、君と一緒に英国に騙されたアイルランド人の兵士たちと、耳を土ぼこりでふさがれたまま、何も聞かずに、共に寝ているがいい、と吐き捨てるように言いながら、イェイツはこの詩を結んでいる。その言葉には、期待をかけた若い友人をむざむざ死なせたことへのイェイツの口惜しさと、英国政府のやり口に対する怒りが滲んでいる。

最後のプロテスタント貴族

グレゴリー夫人も実は初めのうちは息子のロバートと同じく、アイリッシュプロテスタント貴族として親英的な姿勢をとっていた。イェイツが1886年21歳のとき初めてクール荘園に招かれて彼女に会った。そのとき、彼女は英国との連合の継続を支持するユニオニストで34歳だった。当時彼女はアイルランドに同情的なイギリス首相グラッドストーンに宛てて、彼がイギリス国会に上呈中であったアイルランド自治法案（第1次法案）に反対するパンフレットを書いていた。おそらく法案がアイルランドをイギリス連邦並みの自治国家にしようとしていることに反対したのだろう。その後まもなく、イェイツとグレゴリー夫人の二人の中にケルト系でカトリックの、貧しい荘園の領民への愛情が高まり、彼らへの関心も深まり、それらは、引いては英雄時代のゲール民族の神話や物語の翻訳に向かう情熱へと変わっていった。だが、彼らの愛情は決してカトリックの人々だけに向けられたのではなく、すべてのアイルランド人に向けられていた。1798年に宗教や政見を越えて結ばれた「アイルランド人統一党」の対英反乱が起こったが、1898年、この対英反乱を祝う100年祭で、グレゴリー夫人はたぶん初めて全アイルランドが一つになって「自由」を求めたことを忘れないために反英派のナショナリストもユニオニストも、そして、

両派の結合を引き離している日和見主義者も無関心派も、誰もが自分の庭に「自由の木」として、少なくとも1本の木を植えることを勧めている（E. マリンズとJ. パーキス共著『イエイツ序論』, 1994, P. 166）。

しかし、何よりもイエイツとグレゴリー夫人の二人の方向を一変させたのは、ダブリンの復活祭蜂起とグレゴリー少佐の死と英アイ戦争だった。とくにイエイツについていえば、「復活祭 1916年」の詩の中では、イエイツはまだ「それでも英国は約束を守るかもしれない」とつぶやいている。アイルランドが徴兵制を認め、対独戦争で英国に味方をしてくれるなら、戦後に自治を認めるであろうという英国の約束のことだ。しかし、「アイルランド人空軍士官、死を予見する」では英国に欺かれた若い「アイルランド人」士官のむだな死を呪っている。

しかし、イエイツは「復活祭 1916年」の詩を秘密出版にした。これは彼がイギリス政府当局からにらまれることを覚悟していたことを示している。現行のテキストには、詩の終わりに1916年9月25日の日付の記載があるが、それはイエイツが事件後「ただちに」稿を書き始め、半年後には完成したことを示すにとどまっている。実は、たぶん秘密出版をひきうけてくれたであろう、クレメント・ショーターという人物に出版を依頼したのであることが現在知られている。そして1917年にはショーターの手もとでグレゴリーとほかの何人かの人の限って発送されたが、公刊の延期はそれらの人たち全員に当局の嫌疑がかかることをイエイツが恐れたためであった。一般の読者に晴れて公刊されたのは1920年10月23日の土曜日であった。

グレゴリー夫人も1916年の復活祭のダブリン市民軍の蜂起が誤りであることを感じてはいたが、その指導者たちが昔アベイ座で彼女が知り合った人たちであることを知って悲しんだ。また夫人は、イエイツも認めていたように、決して臆病な人ではなかった。英アイ戦争が始まると、彼女はたぶん何人かの女性たちと共に、暴徒兵を待ち伏せながら舗道に匍いつくばったままでいることを拒否し、立ったままで「反乱軍」万歳を叫んだという。銃撃戦となると、彼

女は停車させられた市街電車に乗り込み、座席に登って陣取り、手拍子を取って「反乱軍」の歌を歌った。またこの頃の時期に、彼女は英国王の王冠をかさに着て彼女の莊園の村の人々に加えた暴徒兵の言語道断のふるまいを目をこらして見つめながら、アメリカの評論週刊誌『ネイション』にその惨事の模様を書いて無署名で投稿している。キルタータン村での赤ん坊を抱いて乳をやる若い母親たちの射殺事件を初め、キルタータン村と同じゴールウェイ県にあるゴートの町で行われた笞を使っての殴打事件、同じこの町で起きたヘンリーとパトリックという、たぶんまだ幼いラフナン家の兄弟の喉に手を当てて絞め殺したという蛮行が、1920年10月から翌1921年1月までの期間、つまり英アイ戦争のほとんど全期間中に書かれたグレゴリー夫人の日記の連載の中にうかがわれる。

また、この時期よりもっと後になって、1928年にフランク・ギャラハーの『恐怖の日々』という本が出た。著者は1893年、コーク生まれのジャーナリストであった。彼はアイルランド義勇軍（アイリッシュ・ボランティアーズ）のメンバーであり、英アイ戦争の時代には何度も入獄された。ダブリンのマウントジョイの監獄の中で待遇改善を求めたか何かの理由でハンガーストライキに入ったが、最長41日間、最短3日間の苦業に耐えた。ギャラハーの『恐怖の日々』を読んで、グレゴリー夫人はその中の1920年のハンガーストライキの記述から衝撃的な苦痛を覚えた。そして「美しい、でも、胸を裂かれるような本」であると、1928年12月15日号の『ネイション・アンド・アシニアム』に載せたこの本の書評に書いている。

18世紀のプロテスタント支配階級の賢者たちの先進的な姿勢を本当の意味で受けついだのは息子のロバートではなくてグレゴリー夫人だった。クール莊園の最後の継承者となるべき息子のロバートは母親と反対の方向に走ってしまっ、結局は故郷と家を捨てて自爆死を遂げてしまった。グレゴリー夫人の英アイ戦争中の過激な行動は、英国に騙されて空しい死を選んだ息子のかたき討ちであったのかもしれない。そしてそれは同時に、息子と共にキルタータン

の村人を愛し、彼らの文化と生活にこそ真に学ぶべきものがあると信じたに違いない彼女の、酷い目に遭わされた村人たちのかたき討ちでもあった。イエイツもグレゴリー夫人と同じ視点に立って、アイルランドの大地に根づいたジョージ朝の文芸復興、いや文化の再現を夢見たのだった。彼はロバートが自分たち二人を捨てて行ってしまったあと、「戦い」を続けてゆくことをやめなかった。

イエイツはアングロアイリッシュの貴族の家として恥ずかしくないグレゴリー一家に最後まで期待を寄せていた。ロバートができるものなら、もういちどクール荘園に帰ってくれることを領民とともに願っていた。そんなイエイツの心情は1931年2月に書かれ、翌年出版された詩集に収められた「クール荘園とバリリー村1931年」の詩の中に映し出されている。

こつこつと床を突く杖の音 あれは誰かが
 大儀そうに椅子から椅子へと足をひきずって歩きまわる音だ
 名のある職人の手が編んだ大事な本
 古い大理石の頭部の彫刻たち、部屋中を飾る昔の絵画
 遠くから来訪した大人たちも子どもらも
 満足や喜びの声をあげた大きないくつもの部屋
 名もなく名誉もなく 愚行の中から生まれ愚行に生きた者はだれ一人
 継承したことのないこの屋敷の
 あれは最後の相続人

クール荘園はイエイツにとって礼節と秩序と自由の「表象」であった。清らかで美しい聖地としてのアイルランドそのものであった。それはまさにイエイツを取り巻く時代、無法と強制と恐怖に対抗する理念であった。そしてイエイツにとってグレゴリー夫人はこの輝かしい理念を体現する女性であった。だがそのグレゴリー夫人も、この「クール荘園とバリリー村」の詩のすぐ前に書か

れたイェイツの詩「クール荘園 1929 年」の中でその死がイェイツによって予感されている。彼女は 1932 年 5 月 22 日にクール荘園の邸で亡くなった。大きないくつもの部屋の中を杖突きながら、重いからだを引きずるようにして歩きまわって、遠くからの来訪者、すなわち「旅人や学者や詩人」（「クール荘園 1929 年」）に語りかけ、部屋中に飾られたみごとな装丁の本や絵画や彫刻について説明してゆく夫人は、実はこのときすでに胸部の癌にかかっている、耐えがたい苦痛をこらえていたのだ。しかし、ここで注目したいのは、夫人が話しかける相手には、そういう遠くからの来訪者だけでなく、近くに住む、村の子どもたちもいると語られていることである。子どもといっても、次の世代を担う少年たちであろう。

クール荘園は 1927 年に森林管理委員会に売却された。グレゴリー夫人側から払われるわずかな賃貸料で彼女の生涯保有権が保障されたが、結局夫人の死後 1941 年に取り壊された。夫人の死は 1932 年であったが、イェイツも 1939 年に亡くなった。イェイツはグレゴリー夫人の死を悲しみながら、1930 年代に入ってますます暗さを濃くしてくる、世界への「夜」の到来を予感する。しかし彼はその闇と最後まで戦う覚悟を強めていく。そのためには、イェイツの中には、「山上」の仕事場から、いつでも「山」を駈け下りてゆく気持ちが彼の死のときまで用意されていたのである。詩人として最後まで詩人の武器であるペンを離すことはできないという詩人の強い決意が強くあった。だがイェイツは銃を取っての現実の殺し合い、つまり戦争というものを認めることは絶対にできなかった。戦争には、どんな理屈をつけようとも、大義も理念もない。敵も味方もないのだ。

参 考 文 献

- John P. Frayne and Colton Johnson (col. & ed.), *Uncollected Prose by W. B. Yeats, 2 (1897-1939)*, Macmillan Press, 1975.
- Elizabeth Cullingford, *Yeats, Ireland and Fascism*, Macmillan, 1981.
- Donald T. Torchiana, *W. B. Yeats & Georgian Ireland*, The Catholic Univ. of America Press, 1992.

- Edward Malins, *A Preface to Yeats*, First Edition, Longman Group Ltd. 1974; Second Edition, Revisions and additional material by John Purkis, 1994.
- Seamus Heaney, *Finders Keepers, Selected Prose 1971-2001*, faber and faber, 2002.
- Marjorie Howes and John Kelly (ed.), *The Cambridge Companion to W. B. Yeats*, Cambridge Univ. Press, 2006.
- Peter Allt and Russell K. Alspach (ed.), *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*, Macmillan: N. Y. 3rd. Printing, 1966.
- A. Norman Jeffares, *A New Commentary of the Poems of W. B. Yeats*, Macmillan, 1984.
- Timothy Webb (ed.), *W. B. Yeats: Selected Poetry*, with an Introduction and Notes, Penguin Books, 1991.
- 鈴木弘 訳『W. B. イェイツ全詩集』北星堂, 1982.
- 中村孝雄 中村良雄訳『イェイツ詩集』松柏社, 1990.
- 鈴木弘『イェイツ詩辞典』本の友社, 1994.
- 波多野祐三『物語 アイルランドの歴史』中公新書 1215, 1994.
- 後藤浩子編『アイルランドの経験－植民・ナショナリズム・国際統合』法政大学比較経済研究所, 2009. : 第1章(田中美穂), 第2章(山本正), 第12章(森ありさ).
- 荒木映子「特殊性と一般性の間で－イェイツの場合－イェイツとく戦争」(日本イェイツ協会, 『イェイツ研究』第29号) 1998.
- 伊達恵里「大空の死－ロバート・グレゴリー少佐を悼む イェイツのスタンス」岩永弘人, 植月恵一郎編『論集「イングリッシュ・エレジー」』, 音羽書房鶴見書店, 2000.